

15	学校名 上越教育大学附属小学校	21～23
----	-----------------	-------

平成23年度 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

総合的な教育活動（総合単元活動、総合教科活動、心の活動）を中核とした教育活動の充実及び、「人間社会を生きる子ども」の育成を図る教育課程の研究開発

2 研究の概要

幼小中のスムーズな接続に配慮し、6か年を入門期、移行・拡充期、充実・発展期に分ける。そして、それぞれの期の発達特性を生かした教育課程を編成することで、主体的に対象にかかわる資質・能力及び自分の心を見つめる内省的な資質・能力を高めていく。具体的には、以下の3点である。

- ・生活科、総合的な学習の時間を中核とし、図工、特別活動及び道徳を統合した「総合単元活動」を第1～3学年に設定したことの妥当性を検証する。
- ・総合的な学習の時間を中核とし、他の教科との関連を強くした「総合教科活動」を第4～6学年に設定したことの妥当性を検証する。
- ・道徳を中核とし、特別活動を統合した「心の活動」を第4～6学年に設定したことの妥当性を検証する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

子どもの発達特性から「総合単元活動」「総合教科活動」「心の活動」の総合的な教育活動を設定し、これらを中核に、教科、「集団活動」との効果的な関連を図りながら教育活動を展開する。

このことで、子どもは社会のよさや矛盾に正対し、自分と社会とのよりよい在り方を問い続けながら、高く安定した自尊感情をはぐくみ、対象にかかわる様々な資質・能力を伸ばしていくことができる。

（2）教育課程の特例

- ・生活科、総合的な学習の時間を中核とし、図工、特別活動及び道徳を統合した「総合単元活動」を第1～3学年に設定する。
- ・総合的な学習の時間を中核とし、他の教科との関連を強くした「総合教科活動」を第4～6学年に設定する。
- ・道徳を中核とし、特別活動を統合した「心の活動」を第4～6学年に設定する。

4 研究内容

（1）教育課程の内容

社会は、人間と人間の営みによってつくられ、進歩発展し続けてきた。しかし、一方で、よりよい社会を構築しようとする人間の行為が、社会における様々な問題をつくり出してきたことも事実である。私たちは、このような社会において、子どもが様々な問題や矛盾と対峙しながら、一人の人間として、また、社会を構成する一員として、これからの社会をたくましく生きていくことを願い、「人間社会を生きる子ども」の育成を図ることにした。

① 3つの発達期と教育課程の構造

小学校6か年を入門期、移行・拡充期、充実・発展期の3期に分ける。その上で、子どもの発達特性に適した総合的な教育活動を開発し、教科、「集団活動」との効果的な関連を図ることで、子どもの対象にかかわる様々な資質・能力を一層伸ばす。

入門期（第1学年）は、幼稚園・保育園とのスムーズな接続を意図し、「総合単元活動」、教科の2領域で構成し、小学校への主体的な適応を重視していく。移行・拡充期（第2～3学年）では、「総合単元活動」、教科、「集団活動」の3領域で教育課程を構成し、活動範囲や対象を広げながら多様な追求方法を身に付けることに重点を置いていく。充実・発展期（第4～6学年）では、「総合教科活動」、教科、「集団活動」の3領域にさらに「心の活動」を加え、4領域で教育課程を構成する。「総合教科活動」「心の活動」は、子ども一人一人が自らの価値観を形成しながらよりよい在り方・生き方を探るという点で、学び方の共通性がある。いずれも、論理的・総合的に考えたり、内省的に考えたりできるようになるこの時期だからこそ、可能となる。

子どもの発達期を考慮した教育課程を充実させることで、他者や事象とのかかわりの中で、よりよく生きることを求め続ける子どもを育てていく。

入門期 多様な体験を通して学校生活に 適応していく時期	移行・拡充期 活動を広げながら、多様な追求 方法を身に付ける時期	充実・発展期 論理的、総合的に考えたり、 生き方を考えたりする時期
教科活動	教科活動	教科活動
総合単元活動	総合単元活動	総合教科活動
		心の活動
	集団活動	集団活動
1年	2・3年	4・5・6年

② 新設する領域「総合単元活動」（第1～3学年）

第1、2学年の生活科、第3学年の総合的な学習の時間を中核とし、他の教科、及び道徳を取り込みながら大単元化を図る。一貫して体験の振り返り、及び文章表現力を重視し、活動を展開していく。

何事にも興味を示し、活動的な子どもの発達特性を生かし、対象に積極的にかかわる活動を年間を通して関連的に配置することで、子どもの創造性、行動力や豊かな感性を育むことをねらいとする。

総合単元活動では、1～3学年ともに、4つの単元群を設定した。4つの単元群に位置付く小単元をそれぞれ行うことで、多様な人やものとのかかわりが生まれ、自然認識、社会認識、自己認識が培われる。学校生活への適応を第一に考える1年生では、かかわる対象は学級の仲間や家族が中心であり、個人で取り組む課題が中心である。それに対し、2、3年生と進むにつれ、学校周辺から地域へとかかわる範囲や対象を広げていく。さらに、仲間と共同して取り組む活動が中心になっていく。

なお、当校では学級の実態（担任の専門性、子どもたちの願い等）に基づく独自の教育活動を行っている。そのため、例えば1年生では、ポニーなどの動物とのかかわりを中心にすえたり、あるいは遊び場づくりを中心にすえたりして、小活動を関連的に統合することで大単元化を図っていく。

	1年生（入門期）	2年生（移行・拡充期）	3年生（移行・拡充期）
単元群Ⅰ	学校生活に適應したり、家庭や地域の生活にふれたりしていく単元	身近な人や物にはたらきかけ、自分とのかかわりをさぐる単元	身近な地域の生活にふれ人々の工夫や知恵をさぐる単元
単元群Ⅱ	自然にふれ、自然に親しむ楽しさを味わう単元	季節の変化と生活とのかかわりをさぐる単元	季節による変化を追いながら自然と社会のかかわりをさぐっていく単元
単元群Ⅲ	継続的な飼育・栽培活動を通して、生き物に心を通わせていく単元	継続的に飼育・栽培し、生き物に豊かにはたらきかけていく単元	継続的な観察、飼育・栽培活動を通して生き物に豊かにはたらきかけていく単元
単元群Ⅳ	工夫したり、体を動かしたりして、活動を楽しむ単元	創意工夫をはたらかせて、楽しみを実現させていく単元	創意工夫しながら自分たちの発想を基に楽しみを実現していく単元

③ 新設する領域「総合教科活動」（第4～6学年）

総合的な学習の時間を中核とし、他の教科、特別活動を統合しながら、年間を通して対象にかかわり問いを連続して追求できる場を保障する。

筋道立てた思考が可能となってくる子どもの発達特性を生かし、現代社会の今日的な課題の追求を通して、人間としての生き方を探っていくことで、思考力、表現力や自分の主張を形成する力を育むことができる。

総合的な教育活動のねらいを、次の3点に整理する。

1つめは、各教科や体験活動で身に付けた知識や技能を相互に関連付け、新たな見方・考え方を獲得したり、学習の場面で総合的にはたらきかけたりすることで、知の総合化を図る。2つめは、リアルな社会での体験活動により、様々な価値を自覚し、よりよい自分の在り方を探り、葛藤することで、道徳的価値を自覚し、道徳的な判断力を伸ばす。3つめは、環境保全、食糧確保などの現代社会の課題に繰り返しかかわることで様々な立場の人とのかかわり、多面的・多角的に物事を考えたり、公正な見方・考え方をしたりすることができるようにする。

④新設する領域「心の活動」（第4～6学年）

第4～6学年の道徳を中核とし、特別活動の一部を取り込みながら、多面的・多角的に自分の姿を見つめることができるよう、活動を構成していく。

自分自身への関心が高まり、内省的な思考が可能になる子どもの発達特性を生かし、一人一人の子どもが成長していく自分を息長く見つめ、よりよい生き方を探っていくことで、人間の生き方についての見方・考え方を広げ、深めていくことができる。

心の活動のねらいを次の3点に整理する。

1つめは、身の回りの人々とのかかわりを通して、ありのままの自分を見つめさせ、その集積からかけがえのない自分に気付かせていく。2つめは、息の長い追求を振り返ることで変化・成長しうる自分に気付かせていく。3つめは、様々な人の生き方を探ることを通して、よりよくなるとうとする心を耕し続け、必要な価値観を形成していくようにする。

ところで、様々な状況で自分を見つめ、自分の成長をとらえていくためには、どうしても息の長い追求が求められる。そこで、心の活動では、4・5・6学年の特色を出しながら、次第に追求を深めていくようにしていく。

- 身近な人から、ありのままの自分に気付いていくことを意図した活動 (4 学年)
- 様々な人の生き方から、自分の理想の生き方を探っていくことを意図した活動 (5 学年)
- 自分の理想の生き方を、日常生活で確かにしていくことを意図した活動 (6 学年)

当校教育課程では、心の活動を、道徳に代わるものとして位置付けている。心の活動独自のねらいとともに、指導要領に示された道徳的価値や規範の習得も図るようにする。総合単元活動をはじめ、心の活動の年間計画作成の際は、各学年で学ぶべき道徳の価値項目や規範を明記し、照合しながら学習を進めていく。学習の折々に子どもが記述する振り返りシートを教師が読み、一人一人が道徳的規範や社会規範を学んでいる様子を把握し、それを評価、記録していく。

⑤「教科」(第1～6学年)

総合的な教育活動とのより効果的な関連を図りながら、生きてはたらく知識・技能を獲得し、主体的な学び方を育てていく。

⑥「集団活動」(第2～6学年)

友達とともに楽しみをつくり出す活動を通して、集団の一員としての自覚と協力していく態度を育む。

⑦幼・小・中の連続発展した教育課程

上記の教育課程の内容について、附属学校園のこれまでの教育課程研究を生かし、積極的に幼・小・中の連携を図っていく。幼稚園年長児と小学校1年生との合同授業や、中学校の行事への小学生の参加等をこれまでのように推進したり、小学校で学んだ成果を中学校で追跡調査、検証したりしていく。研究推進においても幼稚園及び中学校職員を招き、より多様な立場から検討を行う。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の授業実践から「人間社会を生きる子ども」の姿を集積し、各教科・教育活動で目指す子ども像を具体化する。同時に、「人間社会を生きる子ども」をはぐくむために必要な子どもの資質・能力を探る。 ・新設する領域「総合単元活動」「総合教科活動」「心の活動」における指導内容や指導方法の在り方を探る。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「人間社会を生きる子ども」の内実を探りながら、各教科・教育活動で目指す子ども像を具現するために構想・展開し、活動づくりの方策を探る。 ・「総合単元活動」「総合教科活動」「心の活動」における指導内容や指導方法の在り方を探るとともに、これら教育活動における自尊感情を高める活動の要件を整理する。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで集積、分析してきた「人間社会を生きる子ども」を問い直しながら、目指す子ども像「『人間社会を生きる子ども』の姿」を明らかにする。 ・「人間社会を生きる子ども」を具現するための、よりよい構想・展開の在り方を実践を通して整理し、明らかにする。 ・「総合単元活動」「総合教科活動」「心の活動」における指導内容や指導方法の在り方を探るとともに、これら教育活動の有効性を子どもの姿から評価する。

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「人間社会を生きる子ども」の姿を、研究授業や日常生活の中から集積・整理し、レポートを作成する。職員研修の場でレポートを検討し、各教科・教育活動で目指す子ども像や資質・能力について協議する。 ・「総合単元活動」「総合教科活動」「心の活動」の指導内容や指導方法についての評価を、各学期ごとの振り返りレポートで行う。 ・「人間社会を生きる子ども」の姿に結び付くアンケート調査を子ども、保護者を対象に1月に行う。 ・第1年次の成果発表の場としての研究会を公開し、外部の教員や研究者からの意見を受け、研究開発の成果と課題を明らかにする。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「人間社会を生きる子ども」の姿を、研究授業や日常生活の中から集積・整理し、レポートを作成する。職員研修の場でレポートを検討し、各教科・教育活動における活動づくりの視点や資質・能力について協議する。 ・「総合単元活動」「総合教科活動」「心の活動」の指導内容や指導方法についての評価を、各学期ごとの振り返りレポートで行う。 ・「人間社会を生きる子ども」の姿に結びつくアンケート調査を子ども、保護者を対象に1月に行い、昨年度との比較で、子どもの成長の様子や保護者の意識の変容を評価する。 ・第2年次の成果発表の場としての研究会を公開し、外部の教員や研究者からの意見を受け、研究開発の成果と課題を明らかにする。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・「人間社会を生きる子ども」の姿を、研究授業や日常生活の中から集積・整理し、レポートを作成する。職員研修の場でレポートを検討し、「人間社会を生きる子ども」を具現するための構想・展開の在り方について協議する。 ・「総合単元活動」「総合教科活動」「心の活動」の指導内容や指導方法についての評価を、各学期ごとの振り返りレポートで行う。 ・「人間社会を生きる子ども」の姿に結びつくアンケート調査を子ども、保護者を対象に1月に行い、3年間の比較で子どもの成長の様子や保護者の意識の変容を評価する。 ・3年間の成果発表の場としての研究会を公開し、外部の教員や研究者からの意見を受け、研究開発の成果と、今後の課題を明らかにする。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 児童・生徒への効果

ア 知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力、学ぶ意欲などを含めた学力

「人間社会を生きる子ども」をテーマとして、総合的な教育活動を教育課程の中核としながら、教科との横断的な活動を展開してきた。このことで、子どもが生き生きと活動に没頭する中で、課題を自分事としてとらえ、進んで思考し、表現するとともに、知識や技能を確実に獲得することができた。さらに、自信や意欲を醸成しながら、よりよい自分の生き方や在り方を探るようになった。

私は、2頭の豚が来たときのことをよく覚えている。2頭とも、急に環境が変わったせいか、ひどくおびえていた。数日後、環境にも慣れ、あまりおびえなくなった。しかし、私にはなついてくれなかった。私が2頭に近づくと、後ずさりしてしまう。けれど、私はあきらめずに、毎日かかさず会いに行った。すると、2頭の豚は少しずつ、私になついてくれた。私は、もっと2頭の豚が大好きになった。この2頭の豚は「空」と「命果」と名付けられた。

と畜の映像を見て、私が食べているお肉も出血死をしているのかと思った。「空」と「命果」もこんな風になってしまうのだろうか。しかし、「空」と「命果」だけ可愛がってスーパーの豚を食べるのは、どうかと思う。「空」と「命果」は出荷された方が幸せだろうか。

「空」と「命果」を食べたほうが良いと思った。理由は2つある。1つ目は、私たちはお肉を食べて生きているから、「空」と「命果」だけ食べないのはどうかと思うからだ。2つ目は、「空」と「命果」だけを出荷せずに、他の家畜を出荷するのはうまく言えないがおかしいと思うからだ。「出荷」とは私たちが生きるためには、仕方がないことだ。だからといって、「空」と「命果」が死ぬのは仕方がないとは思えない…。

「空」と「命果」を出荷した。出荷は私にとって、とても辛いものだった。あれから1年が経った。今でも、命の重さを考えて「いただきます」を言うようにしている。辛いこともあったが、良い経験だったと思う。大人になってもこの経験を忘れないで生活していきたいと思う。他の人達にも命の大切さを伝えていきたい。
(6年 瑞穂)

イ 自らを律しつつ、他者とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

当校教育課程、とりわけ総合的な教育活動の中で育つ子どもには、いわゆる「自尊心」が高い傾向にあるという実感が共通理解された。他者の考えを排除することなく受け入れ、尊重し、自分の考えをつくり主張するといった姿として多く見られた。

私は、この附属小で、互いに支え、支えられるということを学びました。その結果、自分自身を高める、仲間と共に高め合うということができたのだと思います。仲間に支えられていること、そして仲間がいるということに感謝しています。それから、心の活動で学んだように、今の自分が上を目指そうとする気持ちをもつことができているのは、理想の自分があるからだと思います。だから、これからの自分も常に上を目指せる自分でいたいです。
(6年 由芽)

ウ たくましく生きるための健康や体力

保健領域については、第1・2学年は総合単元活動において、その内容との関連を図りながら「健康」の活動に取り組んだ。総合単元活動では、大型動物を飼育し、その動物のからだやからだのしくみ、健康を窓口として、自分のからだに関心を持ち、健康にすごそうとする姿が見られた。第3学年からは、体育科の中で「健康」の活動に取り組んだ。実生活の経験を通して自分のからだを見つめること、仲間と生活経験を交流させることなどの指導方法の工夫により、自分のからだはもちろん、他者のからだについても関心と思いやりの心をもって、健康な生活をつくっていかうとする姿が見られた。

体育領域では、技能の獲得を直接的に目指すのではなく、仲間と動く楽しさ、運動のおもしろさ、動きの感じ（動感）を重視したことによって、休み時間にも進んで運動する姿が見られた。

エ 人間関係（児童間、児童と教師間）

全児童を対象としたアンケートを実施した結果、児童間および児童と教師間の人間関係を示す結果は次の通りであった。

	質問項目	肯定的評価の割合		
		H21年度	H22年度	H23年度
児童間	あなたのクラスは親切ですか	77%	76%	76%
	一緒に話したり、遊んだりする友だちがいる	92%	99%	99%
児童と教師間	困ったとき、先生に話してみようと思う	76%	75%	75%
	先生は、自分の話をちゃんと聞いてくれる	86%	84%	84%

3年間、いずれの項目についても肯定率が高く、児童間及び児童と教師間の関係は良好だと言える。

このことは、総合的な教育活動において、子どもが協力し合う、仲間の問題を自分事として真剣に考える活動を仕組んだり、教師も子どもと共に活動したりする教師の構えが影響していると考えます。

オ 学校生活や学習についての楽しみ・積極性、満足感・自信

質問項目	肯定的評価の割合		
	H21年度	H22年度	H23年度
学校に来るのが楽しい	94%	94%	93%
授業時間になったら、席について教科書やノートを出している	83%	84%	82%
授業がよく分かる	94%	95%	95%
分からないことがあると、先生や友だちに質問する	74%	81%	77%
授業で学んだことで、「おもしろいなあ」と思っていることがある	91%	94%	90%

いずれの項目についても肯定率が高く、児童は、学校生活や楽しみを見付け、満足感と自信をもって積極的に生活している様子が見え始める。さらに、平成22年度は、肯定率が向上している。このことは、総合的な教育活動において、「自尊感情」がはぐくまれていることの裏付けになると考える。

② 教師への効果

ア 児童への理解

当校では、「子ども理解の原則」に立ち、目の前の子どもが生き生きと学ぶ教育の具現を目指してきた。目の前の子どもをいかに充実させるか、どのように一人一人の子どもを生かすかということに大切にしている。本研究開発において、今一度「子ども理解の原則」に立ち返ることを研究の出発点とし、表出した子どもの姿の要因を子どもの学びの履歴や記述から探りレポートしたり、全教員で検討したりすることを繰り返した。その結果、子どもの姿を多面的にとらえることができるようになったり、常に子どもの姿を肯定的にとらえようとする教師の意識が今まで以上に強くなったりした。

また、教師を対象としたアンケートを実施した結果からも、子ども一人一人のよさを見付け、子どもを肯定的にとらえている様子が見え始める。

質問項目	肯定的評価の割合		
	H21年度	H22年度	H23年度
子どもは仲間の個性や人権を大切にしている	79%	90%	85%
子ども同士、仲良く協力している	95%	100%	95%
子どもは自他の命を大切にしている	95%	100%	95%
子どもは、自分の考えをもち、表現している	95%	100%	90%

イ 教科等への理解と指導方法の改善

「活動の対象、教科・教育活動の内容」に新たな価値を見だし、その価値を生かしながら構想・展開した。これにより、教材・教具の掘り起こし、子どもと対象との出会わせ方、発問・指示の吟味、活動場面の工夫、環境設定など、具体的な内容と方法が明確になった。また、総合的な教育活動だけでなく、教科においても総合的な視野から課題を追求する構想・展開を目指し、子どもを中心とした活動を生み出すようになった。目指す子ども像を設定し、「教科像」「大切にしていること」「活動の対象、教科・教育活動の内容」の3つから活動を構想してきたことにより、次の2点のよさを導き出した。

- 教師が、対象のもつ新たな価値に気付き、よりよい活動を構想・展開しようとする
- 子どもを中心に据え、総合的な教育活動においても総合的な視野から課題を追求する活動を生み出す

ウ 教師の教育実践への意欲・自信・満足感

以下は、本年度転入してきた教員が書いたレポートの一部である。

(前略) 子どもの考えは多様であるため、教師として多様な手立てが必要になる。総合単元活動を中核に据えて教育活動を展開していることを考えると、総合単元活動の時間だけでなく、子どもにとって学校生活のすべてが総合単元活動の学びの場であると考えらるべきである。つまり、朝学校に来た瞬間から、総合単元活動「へんしん」が子どもの活動の中心になるよう、手立てとしての幅をひろげ、仕組んでいく必要があるのである。そのためにも、もっともっと子どもを理解していきたい。

カリキュラムは子どもと共に作り、作りかえるもので、1年間の活動が終わったとき、子どもが生きているカリキュラムが完成できたか、それが「子どもを理解した」ということになるのではないかと思う。 [教職7年目、H23年度転入教員のレポートより]

上記のように、目の前の子どもの事実に学び、自分を見つめながら、教師自らも成長しようとしている姿が当校には多く見られる。子どもを通して、自分の指導の在り方が評価されていることに気づき、実践力をつけようと努めるのである。そして、こういった取組を繰り返しながら、教師は子どもへの理解をさらに深め、実践者として自立していくのである。

エ 教師間の連携・協力

総合的な教育活動を中核に据えることで、互いによりよい実践を構想し、意見交換を繰り返すことが頻繁に行われるようになった。また、「人間社会を生きる子ども」をはぐくむよりよい構想・展開の在り方を探るために、日々の授業実践を互いに参観したり、レポートを記述してそれを検討したりするなど、「人間社会を生きる子ども」をはぐくむ構想・展開の在り方を探る取組が、教師間で活発に行われるようになった。このように、主体的・協働的に学校づくりに参画していく教師の姿が見られるようになった。

③ 保護者等への効果

質問項目	肯定的評価の割合		
	H21年度	H22年度	H23年度
本校の教育目標は、お子様の成長に対する保護者の方々の願いやご希望に合っていますか	94%	94%	92%
本校は、よりよい学校づくりに熱意をもって努力していると思いますか	95%	95%	93%

3年間、いずれの項目についても肯定率が高く、保護者に当校の総合的な教育活動を中核とした教育課程が認知され、評価されていることが分かる。当校の総合単元活動、総合教科活動では、動物飼育を行っている学年が多いが、多くの保護者が動物飼育の手伝いに訪れる。また、活動のフィールドを校外に置いている学年では、保護者が校外学習のボランティア等に参加している事実もある。学校での子どもの生き生きと学ぶ姿に感動した保護者は、自分も子どものためにできることをしたいと願い、積極的に参画するようになり、そのことが自然に受け入れられる雰囲気醸成されてきている。また、豊かな体験活動ができることや、総合的な教育活動が「自尊感情」をはぐくんでいることが理解され、入学希望者の増加傾向が定着してきている。以下は、アンケートや連絡帳における保護者の率直な感想である。

- 総合的な教育活動を中心に、学校でいろんな体験をさせていただき感謝している。私たちにできることがあれば、何でも言っていただきたい。
- 音楽集会（集団活動）では、入場から退場まで、娘の生き生きとした表情を見ることができ、大変感動しました。入学してから私が思っている以上に集団の中で成長させてもらっていると感じました。本当にありがとうございました。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- 当初の計画では、入門期（第1学年）にも「集団活動」を位置付け、入門期を「総合単元活動」、教科、「集団活動」の3領域で構成していた。しかし、「総合単元活動」での活動に没頭させ、自分を存分に表出させながら、徐々に仲間の存在を理解させ、交流をひろげさせていくことが大切であるとの考えから、入門期を「総合単元活動」、教科の2領域で構成することにした。
- 総合単元活動は、子どもの思いや願いに沿って展開する子どもの生活そのものである。よって、子どもの生活に根ざした体験を組織し、活動を通して学ばせる場の工夫をより一層求めていく必要がある。また、当校の1～3年生においては、いわゆる「道徳の時間」に代わって、総合単元活動を中心とした全教育活動の中で道徳性を図ろうとしている。子どもが活動に没頭する中で生まれてくる自分らしさへの気付きを大切にすること、活動の中で生じた問題を基に基本的行動様式を身に付けていくことの2点から、道徳性の育成が図られているかを探っていく。
- 総合教科活動では、対象とのかかわりを繰り返し広げる中、子どもが、自分の在り方を考えさせられたり、悩んだりする思考を経て、自分の生き方を問い続けて行く姿へと導いていくことが大切である。現代社会の課題に正対し、既存の知識や技能や体験をもとに総合的な視点でものごとをとらえ、思考し、人間としての生き方を問い続けていく姿を、さらに目指していく必要がある。
- 心の活動では、子ども一人一人が、書いたり人とかかわったりしながら、自分の姿を見つめ続けていくことで、その楽しさや意義を感じ、心を耕し続けていくことが分かってきた。一時的・断片的な指導に偏ることなく、子どもが自らの力で価値観をつくり出し、よりよい自分を求めていくようになっていく指導を今後も継続していく。
- 総合的な教育活動（総合単元活動、総合教科活動、心の活動）を中核とした教育活動をさらに充実させていきたい。一人一人の教師が、既存の学習テーマや対象にこだわることなく、主体的・創造的に単元開発に取り組みたいと考える。総合的な教育活動の形骸化は、腐敗と停滞を招き、これらの学習の当初のねらいを喪失させてしまう恐れがある。子どもの発達特性を見極め、教師一人一人が目の前の子どもに学びながら、単元開発に取り組んでいく。
- 本研究開発では、当校で大切にされている「子ども理解の原則」に立ち返ることを研究の出発点とした。そして、子どもの姿の要因を子どもの学びの履歴や記述から探り、レポート書いたり全教員で検討したりすることを繰り返してきた。このような取組の過程を経て、主体的・協働的に学校づくりに参画している実感をもつようにもなった。今後は、さらに目の前の子どもの事実学び、目指す子ども像と構想・展開の在り方について絶えず問い直しを図り、よりよい教育課程をさらに創造していくよう努めていく。